

ひたちなか 埋文だより 44



企画展「日立変成岩の石剣」の大型石棒 茨城県内の3つの遺跡から出土した大型石棒を企画展の冒頭に展示しました。1は取手市^{にししかた}西方貝塚。住居跡の柱穴に埋められた状態で検出されました。頭部付近の破片で、文様が彫刻されています。2はつくば市^{わかもり}若森遺跡。頭部の形状はやや異なりますが、同じ石材でほぼ同じ大きさに製作された完形品2点が、並んで埋まっていたと伝えられています。3は鹿嶋市^{やまのうえ}山之上遺跡群。端部を欠損していても残存する長さ160cmは、県内で最大です。

CONTENTS	第13回企画展 日立変成岩の石剣／公開講座「ひたちなか市の考古学」第9回		
	ふるさと考古学 ～遺跡と人のワークショップ～ 2011-2015		
	「出会い、別れ、そして夢考古学の旅路」第16回 真壁町の遺跡の調査 (川崎純徳)		
	展示資料紹介 那珂湊反射炉跡採集の窯資料—水戸藩領内における近世窯業の一側面— (川口武彦)		
	横穴墓を歩く⑮ 愛宕山装飾横穴 (及川謙作)	1ケース・ミュージアム 38	絵になる埴輪2
	ひたちなか市内の発掘調査 2015	ひたちなか市の古墳⑦	鉾ノ宮古墳群
歴史の小窓⑮ コトコト煮込む	虎塚古墳花便り⑮	ネジバナ	ほか

日立変成岩の石剣

— 縄文時代晩期における石棒の製作 —



第13回企画展

2016年2月2日(火)～5月8日(日)



石棒という名前の石器 棒状の石製品を石棒せきぼうと呼んでいます。膨らんだ頭部を、一端あるいは両端に作り出した形が特徴的です。江戸時代には、雷神の持ち物に見立てた民間伝承から雷らい槌づゐなどとも呼ばれていましたが、明治になって設立された東京人類学会の会員たちが、石棒という名前を定着させました。

石棒の用途については、外国の民族事例を参考に食物の加工具や、武器などの実用品と考えられたこともありましたが、しかし、縄文時代でも石棒に移り変わりのあることが明らかにされるにつれて、祭祀の道具など非実用品として認められるようになりました。

縄文時代の中期中葉～後期前葉の石棒は大型太形、つまり長くて太い石棒です。感覚的には一般成人の腕よりも長く太いもので、長さは五〇cm以上になります。長野県の「北沢の大石棒」のように、全長が二二三cmに及ぶものも知られています。これが後期中葉～後葉になると、大型細形、つまり長くて細い石棒が主流となります。これは片手で持つことができる重さのもので、頭部の近くを刀の鏢つばのように突出させた成興野型なりこうやと呼ばれる石棒が、北は北海道から南は九州にまで分布します。岩手県北上山地の粘板岩を素材に製作された石棒が広く流通し、それを真似たものもあるでしょう。

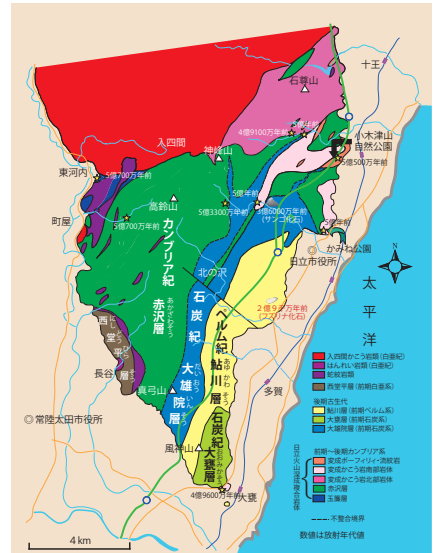
関東地方西部の石剣製作 関東地方西部では縄文時代後期後葉に、短くて平らな石棒、つま



『葬礼私考附録』に掲載された石棒 (太田稲荷神社宝物)



茨城県北部の地形と遺跡の位置



多賀山地の地質 (田切美智雄氏提供)

関東地方東部の石剣製作 縄文時代晩期になると、関東地方東部でも石剣を製作した痕跡が見られるようになります。茨城県北部では、多賀山地に堆積する岩石を素材として、縄文時代晩期に石剣が製作されました。いずれも古生代に堆積した地層が温度と圧力による変成作用をうけた岩石で、日立変成岩と呼ばれています。赤沢層の角閃岩や緑色片岩、大雄院層のクロリトイド片岩や千枚岩も利用されますが、圧倒的に多いのは鮎川層の粘板岩です。

埼玉県域で石剣を製作していたのは、三波川変成帯が露出する荒川流域に大滝、樋ノ下遺跡などが立地し、ここから離れた利根川流域に原ヶ谷戸、新屋敷東遺跡などが位置します。石剣は、剥離—敲打—研磨という工程で製作されます。打ち欠いて大まかな形を作り、たいてい形を整え、磨いて仕上げるといふ順序です。これに、文様の彫刻が加わることもあります。研磨の砥石が置き砥石でなく、もっぱら手持ち砥石であったことが、関東地方東部とは対照的です。

り石剣が出現します。同じ三波川変成帯の緑色片岩であっても、大型の石棒は、角柱のような割れ方をする礫を素材としていました。これに対して石剣は、板のような割れ方をする礫を主な素材として、長さも五〇cmを下回るものがほとんどです。



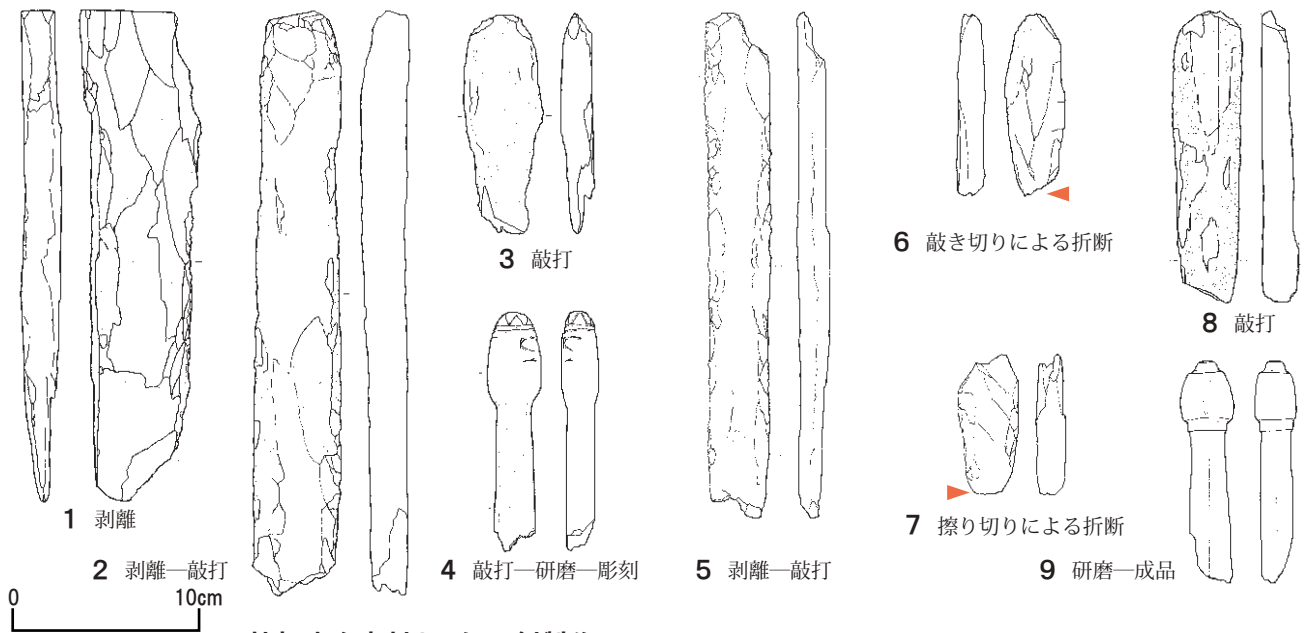
常陸大宮市小野天神前遺跡の石剣と石刀 (個人蔵)



埼玉県高井東遺跡の石剣 (埼玉県立さきたま史跡の博物館所蔵)



鹿嶋市山之上遺跡群の石棒 (個人蔵, 飯島一生氏撮影)



粘板岩を素材とした石剣製作 (1～4: 宮脇A遺跡, 5～9: 上の代遺跡)

から、ほとんどは河川礫が素材であったと考えられます。鮎川の河原や河床には、現在でも石剣の素材に適した礫を見ることができるので、縄文時代にも、ここで素材の礫を採集していたのではないのでしょうか。大ぶりの礫については、現地で大まかに加工し軽くしてから運ぶのが効率的です。

日立市の上の代遺跡や宮脇A遺跡の発掘調査などでも既に資料は出土していましたが、日立変成岩を素材とした石棒製作についてはあまり注目されていませんでした。二〇〇一年に石棒製作遺跡の確認を目的として調査された常陸太田市の本覚遺跡は、未成品とともに製作に関わる石器類が抽出され、敲打と研磨の工程を中心に、石剣と石刀が製作されていたことを明らかにしました。柴田徹により、石材の粘板岩が鮎川層のものと分析されており、多賀山地から久慈山地へと連なる、製作工程の流れが窺えます。

剥離と敲打の工程には、敲打石が用いられました。敲打の工程では、硬質の石材を打ち割り尖った部分で、少しずつ突き削るように加工したと考えられます。未成品には、敲打石の先端が当たった部分が小さいクレーターのように窪んでいます。研磨の工程には、軟らかな砂岩の砥石が用いられました。置き砥石で磨いた痕跡が横方向に、手持ち砥石で磨いた痕跡が縦方向に、擦痕として残されています。石材の折断や、頭部のくびれを作出するには、擦切具として削器が用いられたと考えられます。(鈴木素行)

* 本展示は、次の研究成果に基づいて構成しました。

鈴木素行・柴田 徹 2006『本覚遺跡の研究 一関東地方東部における縄文時代晩期の石棒製作について』

鈴木素行 2015「緑泥片岩の石剣 一関東地方西部における石剣の成立と展開一」『考古学集刊』第11号 37-57頁

* 本展示の石材については、田切美智雄氏にご指導いただき、名称を表記しています。



今回の企画展の開催及び本誌への記事の掲載にあたっては、以下の機関及び関係者からご指導とご協力をいただきました。鹿嶋市教育委員会・埼玉県立さきたま史跡の博物館・桜川市教育委員会・高萩市歴史民俗資料館・栃木県教育委員会・とちぎ未来づくり財団・取手市埋蔵文化財センター・常陸太田市教育委員会・常陸大宮市文書館・常陸大宮市歴史民俗資料館・日立市郷土博物館・水戸市埋蔵文化財センター・若宮八幡宮、飯島 章・飯島一生(こたろう)・猪狩俊哉・石井聖子・糸川 崇・宇留野五郎・宇留野美雪・片根義幸・瓦吹 堅・菊池壮一・越田真太郎・鈴木秀雄・高村恵美・田切美智雄・塚本師也・長根いさこ・西野 保・宮内良隆・矢野徳也・矢部素子・米川暢敬・和田忠彦(50音順, 敬称略)

公開講座「ひたちなか市の考古学」第九回

縄文時代の剣(つるぎ)

二〇一六年二月二〇日から三月一二日の毎週土曜日に、公開講座を開催しました。第九回は、「ひたちなか市の考古学」としては初めて、縄文時代を対象とした講座です。市内の三反田蛭塚貝塚や柳沢大田房貝塚からも出土している「石棒」や「石剣」と呼ばれる石製品について、その製作の実態を中心に研究の現状を紹介いたしました。後日に、講座の記録集を刊行する予定です。



月/日	演 題	講 師
2/20 (土)	縄文のふしぎな形の石器たち —刀剣形の石器を中心に—	(公財)とちぎ未来づくり財団 後藤 信祐 氏
2/27 (土)	みちのくの石棒生産 —岩手県南部の遺跡群から—	盛岡大学 熊谷 常正 氏
3/ 5 (土)	茨城県の古代石材産地と地質 —5億年前から茨城県の山地を見る—	茨城大学名誉教授 田切美智雄 氏
3/12 (土)	茨城県北部における石剣の製作	(公財)ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社 鈴木 素行



茨城大学名誉教授
田切美智雄氏

「大陸に行くとき茨城のようにいろんな石が一緒に出てくることはありません。大陸に行くとき砂岩が出ると砂岩しかない、石灰岩が出ると石灰岩しかないというように、色んな石が出てきません。それに対して、茨城は色んな石が出ますから、硬軟いろいろ使い分けが可能になり、石器製作には有利です。色んな石が出るのは非常に特徴的なものであって、それは日本の特徴でもあります。火山岩や花崗岩などが、地質構造によって一緒に出るところが日本の特徴であるということになります。そのことが石材の産地としての意味を示しているように思います。」



盛岡大学
熊谷常正氏

「石棒の中でも20センチ以上あるとか、10センチくらいまである程度格好のいいものが、報告書などには記録されますが、小さな破片は、これまでほとんど注目されてこなかった。むしろ、石棒がどう動くのか、どのような流通システムに乗っていたのか、あるいは石棒というものはそもそもどんな場面で、何のために使われたのかということの研究の上でも、紹介してきた小さな破片資料ほど重要になるということを改めて感じさせられました。」



(公財)とちぎ未来づくり財団
後藤信祐氏

「縄文時代の刀剣形の石製品は全国から出土しています。特に晩期前半は信濃川と豊川ラインを境として、西が片刃の「刀」で、東が両刃の「剣」になるというような地域差があるということが言えます。ですから、今回の講座のメインテーマが『縄文の剣』ということですが、西のほうに住んでいる人だと、『縄文時代に石の刀はあっても、剣はないよね』というような感じになるかもしれません。第1回の講座では、石剣の頭部や刃部の形、施される文様などに地域差があることがわかっていただければありがたいと思います。」

歴史の小窓 その一六

コトコト煮込む

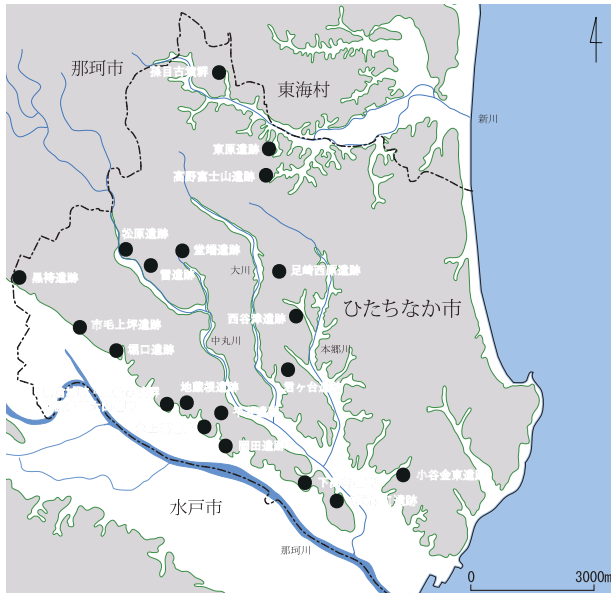


写真は平安時代、九世紀の武田西埴遺跡第六号住居跡から出土した、高さ一五センチほどの小型の甕です。外側は火を受けて変色し、内側は口の

あたりまで黒く汚れています。私たちは形から「小型甕」と呼んでいますが、ようするに「土鍋」です。でも竈にかけて使うにはちょっと小さすぎます。このことがずっと気になっていました。

先日、ある論文を読んでいたところ、次のような文が目にとまりました。「小型のおかず用鍋はカマドの前で直置き調理された。」なるほど！と思いました。小さな土鍋を用いて弱火でコトコトと煮込む調理は、カマドの前に直置きして、吹きこぼれないように、おき火調理したようです。私は「甕は竈にかけるもの」という考えにとらわれ、ちょっとだけ視点を考えることができなかつたのです。長年の謎がある研究によって解決していく。これが学問を続けていく面白さなのです。(佐々木義則)

参考文献 北野博司(二〇一四)「弥生・古墳時代以降の土鍋調理」『考古学ジャーナル』六五四、ニユーサイエンス社



みやご
宮後遺跡の発掘調査

宮後遺跡は、ひたちなか市部田野地区に所在し、中丸川と本郷川の合流点から北東部の標高 26 m の緩斜面部に位置しています。国道 245 号線が遺跡の中を南北に縦断しています。

今回は平成 22 年度に続く 2 度目の調査で、前回の調査区域に隣接する未調査区域の 1,896 m² を対象に、平成 27 年 4 月から 6 月までの 3 か月間にわたり行いました。

調査の結果、竪穴住居跡 10 棟、掘立柱建物跡 1 棟、溝跡 3 条、道路跡 1 条、土坑 6 基、ピット群 2 か所を確認しました。特に、古墳時代後期の第 20 号竪穴住居跡では、竈から土師器の^{かまど}かめ^{かめ}が 3 個体分出土しました（写真）。竈で煮炊きをしていた当時の人々の姿が甦ってくるようです。また、土師器の^{つぎ}坏が床面からまとまって出土し、柱穴からも甕がほぼ完全な形で出土しました。柱穴から完全な形で土器が出土することは珍しく、住居を廃絶する際に建物の柱を抜き取った後の窪地に土器を置いたと考えられ、住居の廃絶に伴う風習や祭祀を考察する上で大変貴重な資料となります。

今回の調査は、道路の拡張幅の調査であったため調査区域が狭く、遺構の全体像がわかる調査をすることができませんでした。しかし、このような状況にも拘らず、10 棟もの竪穴住居跡を確認できたことから、大きな集落が存在していたことがわかり、当遺跡周辺がいかに住みやすい土地であったかを物語っています。

国道を行き交う方々が、車を停めて見学されることもあり、多くの方々が古代の歴史に興味をもたれたようです。（茨城県教育財団 舟橋 理）



二〇一五年度の市内遺跡調査は、試掘調査二九カ所、本調査一カ所で行なわれました。本調査となった岡田遺跡第二八次調査では、弥生時代一基、古墳時代後期一基、平安時代三基の竪穴住居跡が見つかり、土師器や須恵器といった土器が出土しました。また堀口遺跡では七カ所の試掘を実施しましたが、対象面積が七千 m² を超える堀口遺跡第一八次調査では、弥生時代から平安時代にかけての竪穴住居跡が百二十基も確認され、堀口遺跡が市内を代表する集落跡であることを再確認しました。このほか、勝倉小学校校庭の調査では、中世の堀跡が見つかり、勝倉小学校の授業でも活用していただきました。（佐々木義則）



勝倉小学校の調査風景

近所の方のお話によると、昭和 21 年頃に勝倉城の土塁を削って堀を埋め、現在の校庭をつくったそうです。調査ではそのとき埋めた堀が見つかりました。

2015（平成 27）年度市内遺跡調査一覧表

No	遺跡名	回数	所在地	時期	種別	遺構・遺物
1	にしやつ 西谷津遺跡	4 次	馬渡	4 月	試掘	なし
2	まつばら 松原遺跡	5 次	田彦	4 月	試掘	住居跡 1 基（古墳）、井戸跡 1 基（時期不明）を確認。旧石器、土師器、須恵器、陶器が出土。
3	こうやぶじやま 高野富士山遺跡	8 次	高野	5 月	試掘	なし
4	ほりぐち 堀口遺跡	18 次	堀口	6 月	試掘	住居跡 120 基（弥生 3、古墳 20、奈良 5、平安 9、時期不明 83）、土坑 14 基、土坑墓 2 基、溝 2 条、ピット 20 基を確認。旧石器、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、砥石、鉄製品が出土。
5	ひがしはら 東原遺跡	5 次	高野	6 月	試掘	なし
6	ほりぐち 堀口遺跡	19 次	堀口	6 月	試掘	住居跡 1 基（時期不明）を確認。
7	まごめ 孫目古墳群	2 次	佐和	6 月	試掘	溝 5 条（時期不明）を確認。
8	きみがだい 君ヶ台遺跡	10 次	中根	7 月	試掘	なし
9	かつくら 勝倉城跡 かつくら 勝倉古墳群 かつくらふじやま 勝倉富士山遺跡	1 次 2 次 2 次	勝倉	7 月	試掘	堀跡 1 条（中世）、土坑 1 基（縄文）を確認。土師器、陶器が出土。
10	いちげかみづほ 市毛上坪遺跡	15 次	市毛	7 月	試掘	住居跡 1 基（古墳）、溝 1 条（時期不明）を確認。縄文土器、土師器、陶器、石製模造品が出土。
11	こやねびがし 小谷金東遺跡	1 次	小谷金	7 月	試掘	ピット 2 基（時期不明）を確認。縄文土器が出土。
12	くろばかま 黒袴遺跡	4 次	津田	7 月	試掘	住居跡 1 基（弥生）、溝 1 条（時期不明）を確認。縄文土器、弥生土器が出土。
13	おかだ 岡田遺跡	25 次	三反田	7 月	試掘	住居跡 1 基（古墳）、ピット 1 基（時期不明）を確認。弥生土器、土師器が出土。
14	じそうち 地蔵根遺跡	1 次	勝倉	9 月	試掘	住居跡 1 基（時期不明）、井戸跡 1 基（近世以後）、溝 3 条（時期不明）を確認。土師器、須恵器が出土。
15	ひがしはら 東原遺跡	6 次	高野	9 月	試掘	住居跡 1 基（古墳時代後期）を確認。土師器、敲石が出土。
16	ほりぐち 堀口遺跡	20 次	堀口	9 月	試掘	住居跡 5 基（古墳）、土坑 5 基（時期不明）、ピット 13 基（時期不明）を確認。縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、石製模造品が出土。
17	かねあしはなわ 金上端遺跡	9 次	金上	10 月	試掘	住居跡 4 基（古墳 2、平安 2）、溝 2 条（時期不明）、土坑 1 基（時期不明）、ピット 1 基（時期不明）を確認。縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、石斧、砥石が出土。
18	いかずち 雷遺跡	4 次	田彦	10 月	試掘	溝 1 条（時期不明）を確認。
19	おかだ 岡田遺跡	26 次	三反田	10 月	試掘	住居跡 5 基（弥生 1、古墳 1、平安 1、時期不明 2）、ピット 1 基（奈良・平安時代）を確認。弥生土器、土師器、須恵器、陶器が出土。
20	ひがしはら 東原遺跡	7 次	高野	10 月	試掘	なし
21	とうはた 堂端遺跡	1 次	東石川	11 月	試掘	縄文土器、石器が出土。
22	ほりぐち 堀口遺跡	21 次	堀口	12 月	試掘	なし
23	ひらい 平井遺跡	3 次	金上	12 月	試掘	溝 2 条（時期不明）、ピット 1 基（時期不明）、土坑 1 基（時期不明）を確認。旧石器、縄文土器、須恵器が出土。
24	おかだ 岡田遺跡	27 次	三反田	12 月	試掘	住居跡 1 基（古墳）、土坑 1 基（時期不明）を確認。
25	たらしきにしはら 足崎西原遺跡	3 次	足崎	12 月	試掘	溝 1 条（時期不明）を確認。
26	おかだ 岡田遺跡	28 次	三反田	1 月	本調査	住居跡 5 基（弥生 1、古墳 1、平安 3）、土坑 1 基（平安）等を確認。土師器、須恵器が出土。
27	ほりぐち 堀口遺跡	22 次	堀口	1 月	試掘	住居跡 6 基（古墳 3、平安 2、時期不明 1）ピット 2 基を確認。土師器・須恵器が出土。
28	しもたかい 下高井遺跡	6 次	三反田	1 月	試掘	住居跡 2 基（奈良 1、平安 1）、溝 2 条（奈良 1、時期不明 1）、ピット 8 基を確認。土師器・須恵器・鉄製品が出土。
29	ほりぐち 堀口遺跡	23 次	堀口	2 月	試掘	住居跡 1 基（古墳）、ピット 2 基を確認。土師器・砥石が出土。
30	ほりぐち 堀口遺跡	24 次	堀口	3 月	試掘	住居跡 2 基（時期不明）を確認。土師器・須恵器が出土。
31	ごしよのうちいち 御所内 I 遺跡	1 次	柳沢	3 月	試掘	土坑 1 基（時期不明）を確認。須恵器・中世土器が出土。
荒谷地区 （館出遺跡、笠谷古墳群）			中根	2 月 ～3 月	試掘	住居跡 13 基（弥生）、古墳 2 基、溝 11 条（時期不明）を確認。縄文土器・弥生土器・須恵器が出土。



『水彩サークル遊画』は市内のコミュニティセンター主催の水彩画教室から誕生したサークルです。月二回の活動の題材に、埋文センターの土器や埴輪を使いたいという相談を受けたのは、二〇一三年の初夏でした。そこで、収蔵庫に保管している井上コレクションから埴輪と縄文土器を選び、十月に講座室で写生を行いました。

井上廣明コレクションは、旧那珂湊市小川町に生まれた井上氏が蒐集された資料です。稼業の造船業の傍ら船の博物館作りに尽力され、関連資料を集めるとともに考古資料なども数多く収集されました。考古資料、特に形象埴輪は全国有数のコレクションで、井上氏の死後、遺族から埋文センターに寄贈されています。

「絵になる埴輪」埋文センターに訪れるお客様の中には、『遊画』の方々のように陳列遺物を創作の題材とされている方をときどきみかけます



が、なかなか作品にお目にかかる機会はありませんでした。写生会の折、『遊画』の方々に考古遺物と一緒に絵画の発表を提案し、二〇一四年三月に「絵になる埴輪」を開催しました。絵画と実物の双方を比較展示することで、いつもとは違う雰囲気になりました。みなさんの絵に誘われて、埋文センターに初めて足を運んでくださった方もいて、絵画だけではなく考古資料も興味深げに見学されていました。その後『遊画』のみなさまには、毎年秋に写生に来ていただき、今回再び展示を行うことができました。

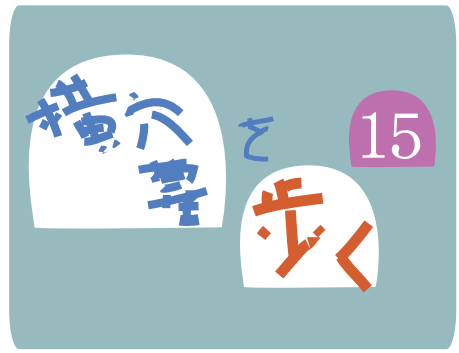
最後になりましたが、水彩サークル『遊画』の皆様のご協力をいただき展示会が開催されましたことを深く感謝申し上げます。(菊池順子)



オッサンも装身具

(2015.10.16 撮影 博物館実習)

モデルは本田勉さんです。



宮城県仙台市
あたごやま
愛宕山装飾横穴

及川 謙作

(仙台市教育委員会)

愛宕山装飾横穴はJR仙台駅の南約1km、仙台平野の奥、太白区越路の青葉山丘陵の東端部が広瀬川と接する丘陵の南側斜面に所在する。この地域には数多くの横穴墓が存在し、この愛宕山装飾横穴を含めた愛宕山横穴墓群をはじめ、近隣には大年寺山横穴墓群・茂ヶ崎横穴墓群・宗禅寺横穴墓群・二ツ沢横穴墓群が所在しており、これらを総称して向山横穴墓群とも呼ばれている。これらの横穴墓はこれまでに一〇〇基以上が発掘調査されているが、未発見の横穴墓が同数か、それ以上存在するものと考えられている。愛宕山装飾横穴の対岸に位置する大年寺横穴墓群にも奥壁と床が赤く彩色され、屋根構造を描いたと思われる線刻が彫られた装飾横穴が1基発見されている。

愛宕山装飾横穴は、昭和五十一年に道路工事の際に偶然発見され、その後仙台市教育委員会に



愛宕山装飾横穴と周辺の遺跡位置図

よって調査が行われた。平面形は不整形で玄室幅は約一・九mで床面には排水溝が設けられている。立面系はドーム状の宝形造で、玄門前は閉塞石で塞がれていた。

横穴が発見された際に壁画が描かれていた玄室の奥壁の一部が破損してしまい、また剥落や劣化のため一部が不鮮明になってきているものの、壁画は赤色顔料で上位に三本の平行線の間直径八〜一三cmの円文を二段に配し、その下に円形と円内に十字を施した文様や櫛羽状の文様などが描かれている。

出土遺物は土師器の坏が羨道の側壁沿いの底面から三〇cm程浮き上がった位置から、刀子の



愛宕山装飾横穴奥壁壁画
(仙台市教育委員会提供)



愛宕山装飾横穴奥壁壁画図
(仙台市教育委員会提供)

破片が玄室の中央部の床面から出土している。またこれ以外にも須恵器と土師器が少量出土している。人骨は五体分確認されており、壮年の男性と女性、八歳前後の年少者の男子、壮年から熟年の男性の骨などが確認されている。

出土遺物から愛宕山装飾横穴が構築された時期は七世紀後葉以前であると考えられている。この時期は横穴から南東約3kmの位置に所在する東北最古の城柵である郡山遺跡（一部が国指定史跡）のI期官衙が造営された時期とほぼ一致することから、両者の関係を窺わせるものがある。



墳丘実測図

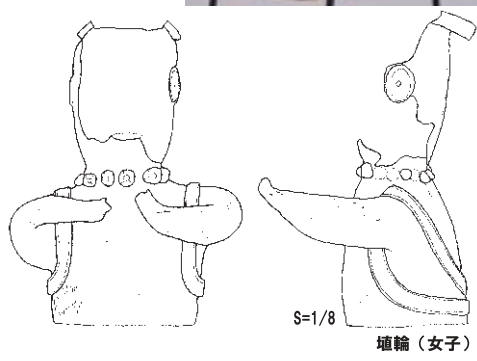
石棺調査



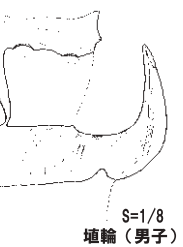
周溝



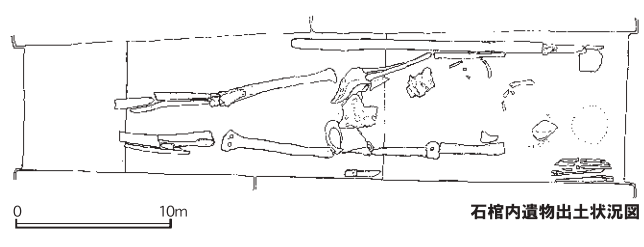
石棺



埴輪 (女子)



S=1/8
埴輪 (男子)



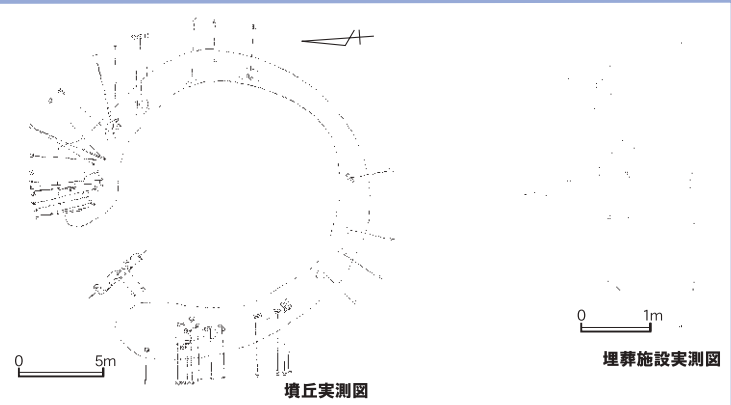
石棺内遺物出土状況図



鉄鏃と刀子



埴輪 (女子)



墳丘実測図

埋葬施設実測図

見学ガイド

- * 古墳は、現存していません。
- * 銚ノ宮古墳群第2号墳から出土した形象埴輪は、ひたちなか市の指定文化財です。
- * 銚ノ宮古墳群から出土した石棺や遺物は、ひたちなか市埋蔵文化財調査センターの標本陳列室に展示しています。

人の指紋が残っているものがある。警察の専門家に調査を依頼したところ、同一人物が埋葬された貴重な事例となりました。



ひたちなか市の古墳

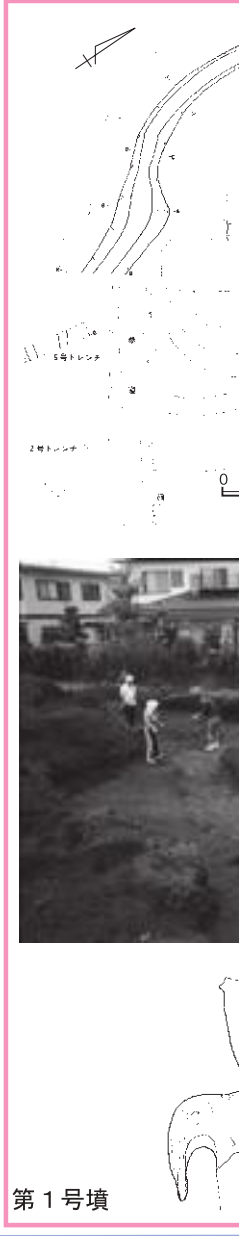
7 銚ノ宮古墳群

銚ノ宮古墳群は、ひたちなか市高場の銚ノ宮神社周辺に位置しています。記録によると、かつては10数基の古墳が存在していたようですが、調査では3基しか確認されていません。発掘調査のきっかけは、1966（昭和41）年3月に山林を開墾中にブルドーザーが石棺を破壊したことから、緊急調査となりました。調査は、第1号墳と第2号墳で実施されました。

第1号墳は、墳丘が著しく破壊されていたため、調査時は直径20mの円墳として報告されましたが、1982（昭和57）年の第2次調査で全長32m、後円部径20m、前方部幅23mの前方後円墳であることが判明しました。埋葬施設は、地元の軟質の凝灰岩を加工した箱式石棺です。石棺内には、人骨や大刀1口、刀子1口、鉄鏃19本がありました。古墳の墳丘には埴輪がたてられていたようですが、開墾によって動かされていました。埴輪には、人物埴輪や形象埴輪、円筒埴輪があります。人物埴輪には男子像と女子像がありますが、いずれも顔を欠損しています。女子像は、手を前で合わせる仕草で、背中には襷を掛けているような表現がみられます。

第2号墳は、第1号墳の北約50mに位置していました。墳丘はほとんどが失われていましたが、C字状の周溝が確認されました。周溝から、外径18mの円墳と考えられます。埋葬施設は木棺で、刀子2口が出土しました。周溝内からは、人物埴輪や馬形埴輪、円筒埴輪などが出土しました。人物埴輪は頭部が4体出土しましたが、1体は顎の部分のみでした。3体の顔の表情はとても豊かで、笑みをたたえる埴輪はかつて市の土産物として販売もされていました。馬形埴輪は、ほぼ全体が復元できるもので、お尻の近くには鈴の付いた飾りが見られます。

2つの古墳から出土した埴輪は、その器形や大きさから、古墳から南東に約3kmの場所に位置する馬渡埴輪製作遺跡から供給されたことが推定されています。よって、当古墳群は、埴輪の製作地とその供給先との関係を知ることの出来る、貴重な例といえます。



第1号墳



第2号墳

埴輪出土状況



埴輪（馬）



円筒埴輪



ミニ知識
出土した埴輪には、工りました。それらの指紋をたところ、指紋が一致した作成したことを科学的に実

* 古墳の場所や市内の古墳の概要については、『埋文だより』第37号をご覧ください。
* 一部の写真はひたちなか市広報広聴課から提供をうけました。
* 参考文献：大塚初重ほか 1972 『銚ノ宮古墳群発掘調査報告』勝田市教育委員会

川崎純徳・鴨志田篤二 1983 『昭和57年度 銚ノ宮古墳発掘調査報告』

長岡さんとの出会い 真壁町(現・桜川市)は

筆者の母の生まれ故郷であり、少年期には何度となく訪れていたが考古学を通しての出会いには長岡さんを介してである。長岡さんは下館市(現・筑西市)に住んでおられた。県史編纂のための資料調査に何回となくお宅にお邪魔した。それ以来、下館市や真壁町での氏の調査に同行した。その縁で下館市から試掘調査を何回か頼まれた。真壁町の当時の社会教育課長は根本哲男さんであり、歴史民俗資料館の館長を兼務されていた。当然初対面であったが話し込んで行くうちに母の親類筋にあたる人と分かり、大変お世話になったものである。北椎尾天神塚古墳の出土遺物も長岡さんの仲介で実見したが三角板皮綴の甲冑類には大変驚いた。一九八八年に真壁町教育委員会で発掘調査を行うこととなり宮内良隆さんと発掘調査を行った。

ある日、長岡さんが「発掘調査の仕方について教えてくれ」と言ってきた。「石岡市東大橋原遺跡の調査があるから参加しては」と伝えるとやってきた。一九七八年であったと思う。何日か来るのかと思ったら「分かったから」と言っただけの参加となった。その後、長岡さんから電話がかかってきた。「いま弥生の遺跡を発掘している。分からなくなったから来てくれ」と言う。一日だけの研修で調査ができるはずはないのだが、そんなことにお構いなしに長岡流とでも言うのである

出会い、別れ、そして夢考古学の旅路

第16回 真壁町の遺跡の調査 —真壁町史編纂と真壁城跡—



北椎尾天神塚古墳の新聞報道 (『いはらき』1988.6.19)



川崎 純徳

う。何日か測量や実測等の手伝いに行った。下館市外塚遺跡の調査は長岡さんの肝いりで行ったが整理半ばにして幽冥境を異にされた。研究熱心の惜しい人物であった。長岡さんの後を継いで真壁町史編纂に加わった。

真壁町史の編纂 真壁町史は通史なしに資料集を刊行しようとするものであり、他の市町村史とは異なっていた。本来の市町村史のあるべき形をとっていた。『真壁町史料・考古資料編』は長岡さんが『縄文時代編』を編集していた。内容は主として縄文後期の解説であったが、緻密な分析はさすが長岡さんの仕事であった。長岡さんが抱いていた構想にしたがい、「縄文編」「古墳編」「古代編」を出したが、町村合併によって真壁町史編纂事業は終わった。

真壁城跡の国史跡指定 合併前の一九九四年に真壁城跡が国の史跡指定を受けることになった。すぐに町長の平間小四郎さんから「役場に来てほしい」との連絡が入り、役場で専門職員を探してほしいとの依頼を受けた。また一年以内に真壁城跡整備基本計画を作成することについての協力を依頼された。専門職員として星龍象氏を推薦した。その後真壁城跡の調査、整備は順調に進んでいる。真壁城跡の整備に情熱を傾けていた平間町長が亡くなり、また調査に手腕を発揮した星さんが大病を患い第一線を退いて療養生活に入り、そのまま二〇一三年に定年退職されリハビリを兼ねて京都に在住と言う。健康を案じている。

2011 - 2015

ふるさと考古学

遺跡と人のつながり

2006年度からスタートした小・中学生体験講座「ふるさと考古学」は、2015年度で10年となりました。この10年間で、119回の講座を開催し、土器や石器、壁画づくり、ちょっと昔の生活体験など、ひたちなか市の歴史や自然を基に、様々な講座をしてきました。2006年度から2010年度までの5年間については、『埋文だより』35号に掲載しましたので、ここでは、2011年度から2015年度までの5年間の講座についてご紹介いたします。

土器



土



本物の土器を見て触って、それをまねて縄文土器を作ります。最後は野焼きをして、完成させます。



土というものが、私たちの生活や歴史とどのように関わっているのかを、身近な土層を見ながら、学習します。



食



遺跡から出土した炭化種実を参考に古代の食を考え、同じ食材を使って食事を作ります。



壁画



虎塚古墳の顔料分析をもとに、絵の具や接着剤を作り、それを使って文様を描きます。最後にみんなで組み合わせると、虎塚古墳の壁画のレプリカが完成です。

2010年度までの「ふるさと考古学」は、文化庁地域文化振興事業「伝統文化こども教室」に採択され、その趣旨に基づき実施してきました。2011年度からは、ひたちなか市の事業として公社に委託され、講座を行っております。

貝塚



柴田 徹 氏

石

河原の石を観察して、
標本や石器を作ります。



中村哲也 氏



黒住三郎 氏



小宮 孟 氏



貝塚から出土した
貝や骨を調べて、
それらを分類し、
縄文時代の環境を
考えます。



石井聖子 氏

川



濱田篤信 氏

古代人が
那珂川と
どのように
に関わり
を持って
いたのか
を学びます。



座長 さかいひろ三 氏



ちょっと昔 体験



さわる



フィールド 探検

身近な遺跡や自然を観
察しながら探検します。



広瀬浩三郎 氏

目隠しをし
て遺物をさ
わることに
よって、触
ることの重
要性を学び
ます。



戸坂明日香 氏



矢野徳也 氏



顔

遺跡から出土した本物の人
骨から、顔を復元します。



講座の受講生は、小学4年生から中学生を対象としています。2015年度までの受講生の参加者数は、2011年度が22人、2012年度が25人、2013年度が31人、2014年度が20人、2015年度が27人の合計125人となります。

那珂湊反射炉跡採集の窯資料

—水戸藩領内における近世窯業の一側面—

川口 武彦



採集した焼締陶器・窯道具・耐火煉瓦

茨城県指定史跡「那珂湊反射炉跡」に隣接する山上門脇の斜面を歩いた際に焼け歪んだ焼締陶器片と窯道具、耐火煉瓦片、在地産とみられる磁器片を採集しました。焼締陶器片と磁器片は、耐火煉瓦と一緒に焼物が生産されていたことを示唆する資料です。また、窯道具は出土している耐火レンガにそれを使用したとみられる痕跡が確認されることから、窯道具を利用した重ね焼きの技術が採用されていたことを指摘し、その重ね方を復元しました。

はじめに

本報告では、茨城県指定史跡「那珂湊反射炉跡」を訪れた際に隣接する山上門脇の斜面において採集した焼け歪んだ焼締陶器片と窯道具、耐火煉瓦片、磁器片を報告し、この地に展開した近世窯業について若干の私見を述べたいと思います。

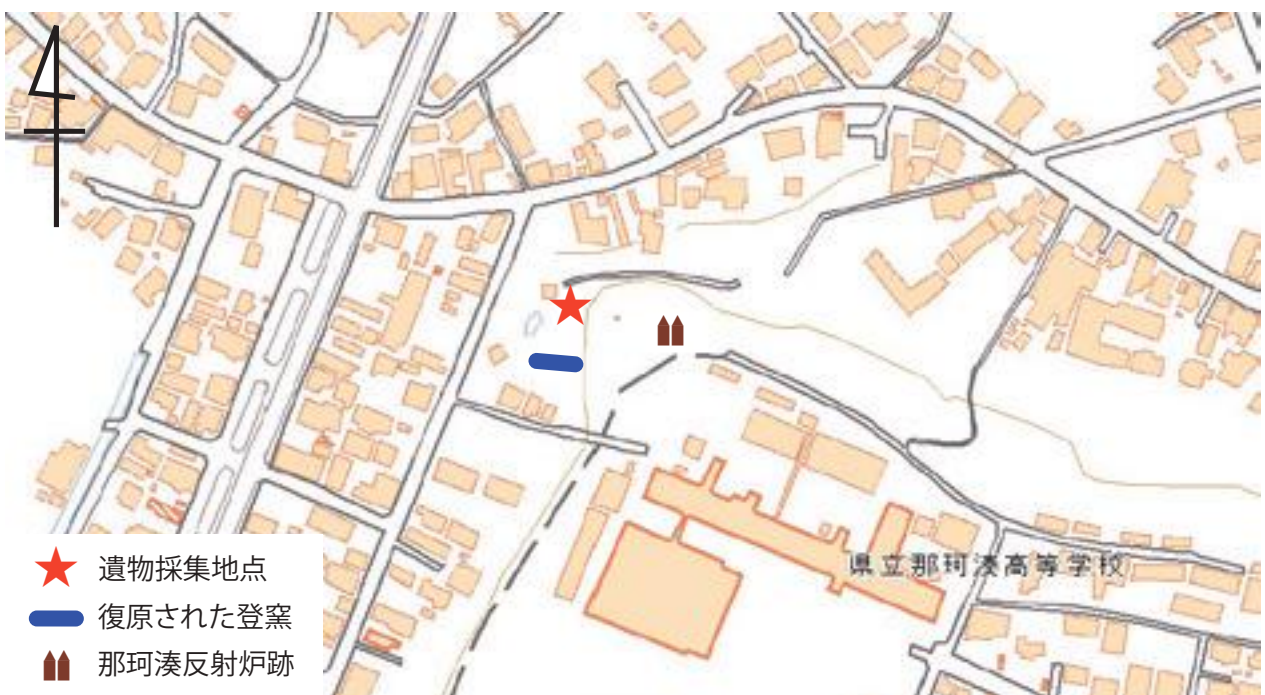
那珂湊反射炉跡の位置と遺物の採集地点

那珂湊反射炉跡は、ひたちなか市釈迦町三―二に所在しています（図1）。那珂湊反射炉は台地上に復原されていますが、遺物を採集した地点は、那珂湊反射炉が立地する台地の斜面で、山上門をくぐったすぐ左手です（図1）。

採集した遺物の特徴（図2）

1は、焼け歪んだ焼締陶器の碗の破片です。轆轤整形によるもので、無色透明釉が掛かっていますが、底裏に透明釉はみられず、器厚は0.3 cm ～ 0.5 cm、高台径0.6 cm、高台径3.9 cm ～ 4.0 cmで、胎土に黒色粒子を多く含み、色調は灰白（2.5GY）です。焼け歪んでいることからこの付近で生産されたものと考えられます。

2は、磁器の碗の口縁部片です。轆轤成形で、染付は内面に口縁部連続文・一



- ★ 遺物採集地点
- 復原された登窯
- 🏠 那珂湊反射炉跡

図1 遺物採集地点・那珂湊反射炉跡・復原された登窯の位置関係（地理院地図電子国土Web より転載・加筆）

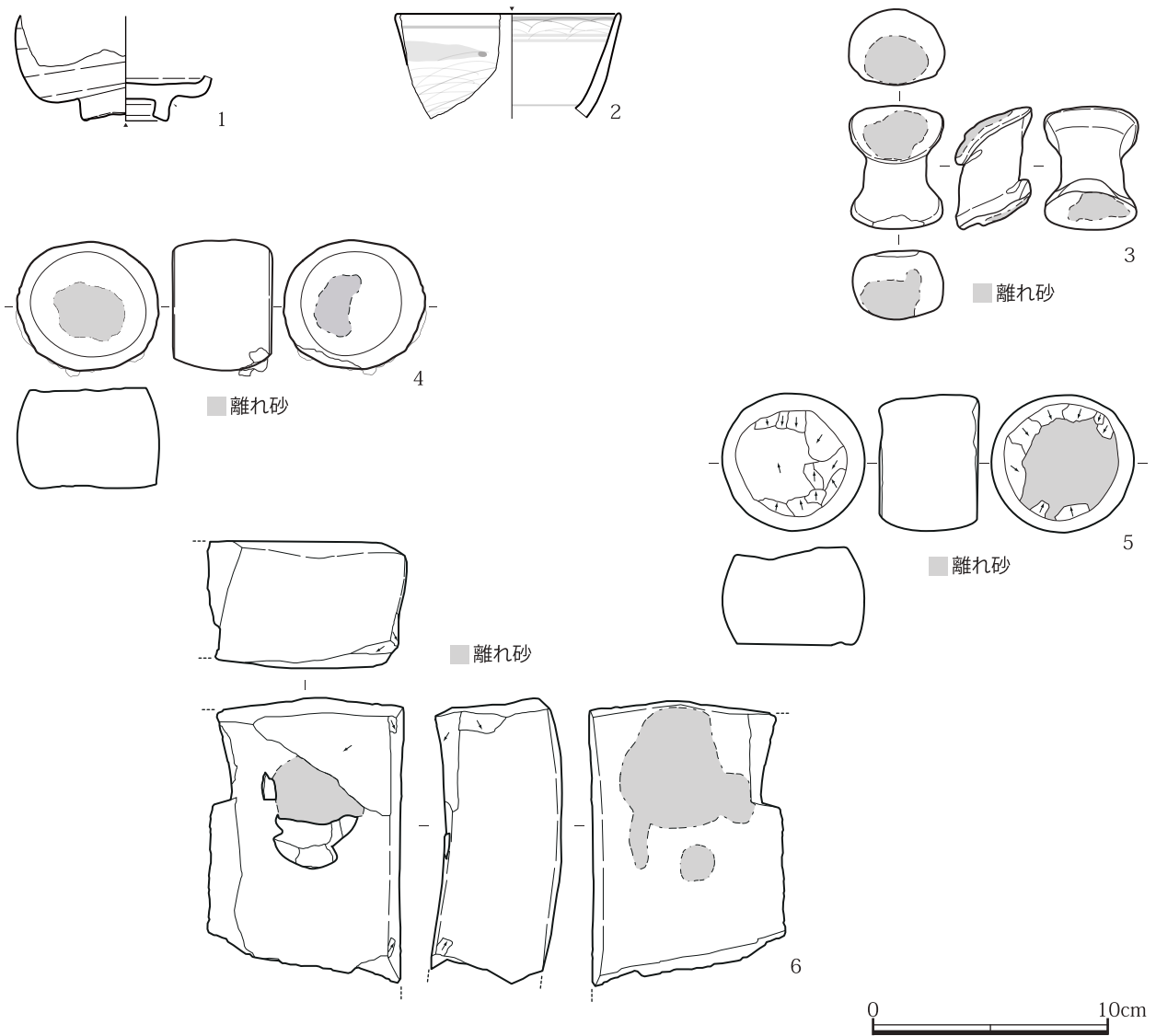


図2 採集した焼締陶器・窯道具・耐火煉瓦 (S=1/3)

重圏線、見込み一重圏線、外面に口縁部一重圏線、薄文が描かれています。口縁部径は9.7cm、残存器高は4.5cm、器厚は0.3〜0.6cmです。割れ口にみられる胎土や色調の在り方などから搬入品ではなく在地産の可能性が考えられます。

3は窯道具のひとつで円柱状の体部の上下両端に円形の平坦面を持つていることから、肥前窯業圏で一般的にトチンと呼ばれるものです。上下両端の平坦面は焼け歪みにより折れ曲がり、それぞれ離れ砂が付着しています。6の耐火煉瓦片にもこのトチンの上下にみられる円形の平坦面と同じ直径の離れ砂の痕跡が観察されることから、耐火煉瓦の重ね焼きに使用されたと考えられます。また、図上で下端とした平坦面の一部には折断面が認められ、6の耐火煉瓦にも固着したトチンの一部が観察されることから、耐火煉瓦に固着してしまつた際に剥がし取る行為が行われていたと考えられます。胎土には黒色と白色の粒子が多く含まれ、色調は灰白(5Y8/1)です。本来の形状は高さ・平坦面径4.0cm、円柱部径2.5cmです。

4と5は円柱状の窯道具です。上下両端の平坦面には離れ砂の痕跡が残され、直径5.0〜5.5cmで、厚さは3.8〜4.2cmです。6の耐火煉瓦にもほぼ同じ直径の離れ砂の痕跡が残されていることから、耐火煉瓦の重ね焼きに使用された焼台と考えられます。5は表裏両面に打撃による剥離痕が観察されることから、耐火煉瓦に固着した

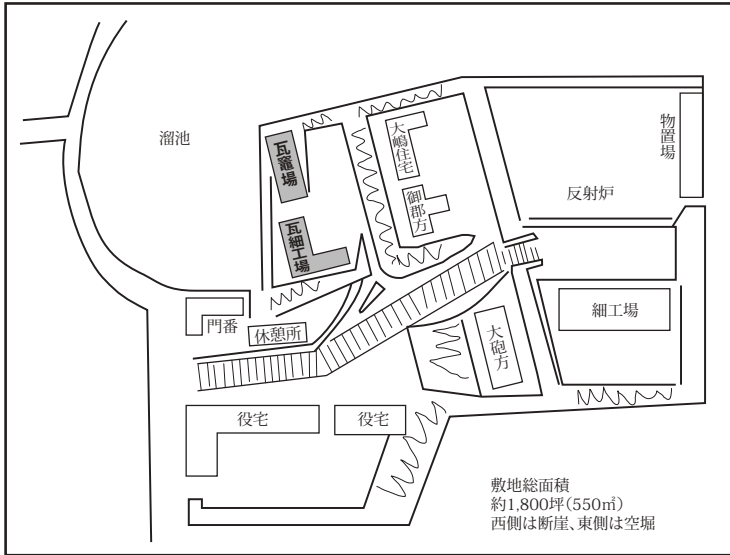


図3 那珂湊反射炉敷地配置図(金子 1995a の図をトレース、加筆)

際に叩いて剥がし取る行為が行われたと考えられます。いずれも胎土には黒色と白色の粒子が多く含まれ、色調は灰白(5Y8/1)です。6は焼け歪んだ耐火煉瓦片です。全体の形状は不明ですが、厚さ4.5〜5.0cm、表裏両面に円形の離れ砂の痕跡が残されています。表面は直径4.0cmであるのに対し、裏面は4.5cmとやや大きいのが特徴です。胎土には黒色と白色の粒子が多く含まれ、色調は灰白(5Y8/2)です。

これらの遺物を採集した地点を那珂湊反射炉敷地配置図と重ねてみると、瓦籠場と瓦細工場



図4 離れ砂の痕跡を持つ耐火煉瓦(ひたちなか市教育委員会提供)

の位置と重なることが分かります(図3)。このことから、これらの遺物は耐火煉瓦を焼成する登窯で焼成されたが、製品として使用できなかった失敗作やその焼成の際に使われた窯道具と考えることができます。

耐火煉瓦焼成の際の重ね焼きの方法

次に耐火煉瓦を焼成する際の重ね焼きの方法について考えてみましょう。先に報告した図2の3のトチンと図2の6の耐火煉瓦にはそれぞれ相互に同じ大きさの円形の離れ砂の痕跡が残

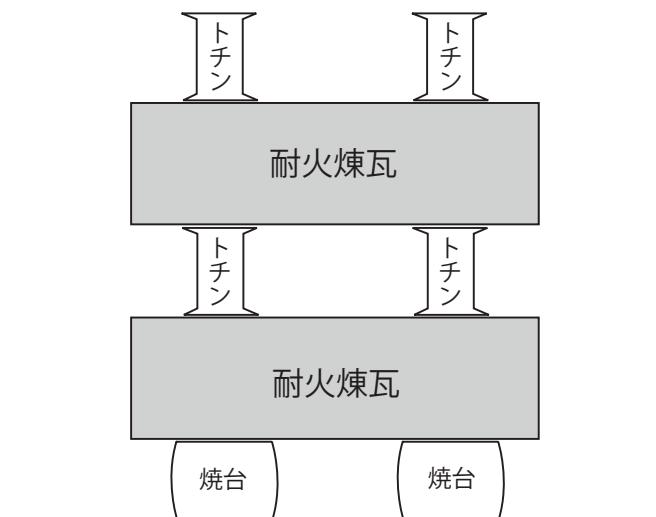


図5 耐火煉瓦の重ね焼き断面模式図 (S=1/4)

されていていました。また、図2の4と5の円柱状の焼台と図2の6の耐火煉瓦の反対側の面にもほぼ同じ大きさの離れ砂の痕跡が残されていました。そのことから、このトチンと円柱状の焼台は登窯の中に耐火煉瓦を窯詰めする際、効率的に空間を利用し、火が良く通るよう重ね焼きを行っていたことを示唆します。それでは、登窯の中でどのように重ねられたのでしょうか。それを考えるヒントとなるのが、ひたちなか市教育委員会に保管されている正方形の耐火煉瓦です(図4)。この耐火煉瓦の表面には「右と十六」と書かれていますが、詳細に観察すると

文字の脇に直径4cmほどの円形の離れ砂の痕跡が4つ確認できます。このことから耐火煉瓦を重ねる際にはトチンを平坦面の上に4つ置き、さらに積み重ねたことが分かります。また、円柱状の焼台については、その安定性から一番下に置かれる耐火煉瓦が登り窯の砂床に直接触れないよう、間に挟んで置かれたものだろうと考えます。那珂湊反射炉の耐火煉瓦を焼成する際に採用された重ね焼きの断面模式図を図5に示してみました。

おわりに

本報告では茨城県指定史跡「那珂湊反射炉跡」に隣接する山上門脇の斜面において採集した焼締陶器片、磁器片、窯道具、耐火煉瓦片を紹介しました。焼締陶器片と磁器片は、那珂湊反射炉に耐火煉瓦を供給した登窯において焼物も生産されていたことを物語る資料です。また、窯道具は出土している耐火煉瓦にそれを使用したとみられる痕跡が観察されることから、登窯内の空間を効率的に利用し、良質の耐火煉瓦を生産するため焼成に際して重ね焼き技術を採用していたことを裏付ける貴重な資料です。また、窯道具や耐火煉瓦が町田の土と小砂の磁器土を混ぜた特徴的な胎土を持つ点は、那珂湊反射炉の建設に際して、水戸市七面製陶所、常陸太田市町田窯、栃木県那珂川町小砂等で焼物生産に従事していた在地の陶工たちの関与があったと

いう指摘(渡辺二〇〇五)を裏付けるものです。登窯の遺構は未確認ですが、近い将来何らかの調査が行われることを期待します。なお、これらの採集遺物については、ひたちなか市埋蔵文化財調査センターへ寄贈させていただきました。今後、那珂湊反射炉跡の調査研究の基礎資料等として活用いただければ幸いです。

【謝辞】

本報告をまとめるに当たり、家田淳一、河野一也、河野真理子、木本挙周、斉藤新、関口慶久、堀内秀樹、水本和美的の諸氏からは資料について有益な御助言を頂戴するとともに文献貸与等で御協力いただきました。御芳名を記して感謝いたします。また、平成二六年度

及び二七年度文化庁文化財部記念物課行政実務研修生の長谷部善一、川口雅之、櫛島幸浩、坂尻望、田村聡、切通雅子、能登原孝道の諸氏を現地へ案内する機会がなければこれらの遺物と巡り会うことはありませんでした。地元の文化財を案内する機会を与えてくれた同期研修生たちにも感謝の気持ちを表します。

註

- (1) 水戸市教育委員会の関口慶久氏の御教示による。
- (2) こうした粒子を含むものは、町田の土に小砂の磁



復元されている那珂湊反射炉

器土を混ぜている可能性が高いと大成エンジニアリング株式会社の河野一也氏に御教示をいただいた。

- (3) 註2に同じ。
- (4) 註2に同じ。

参考文献

- 金子 功 一九九五 a 『反射炉Ⅰ ものと人間の文化史77-Ⅰ』法政大学出版局
- 金子 功 一九九五 b 『反射炉Ⅱ ものと人間の文化史77-Ⅱ』法政大学出版局
- 竹内清和 一九九〇 『耐火煉瓦の歴史—セラミックス史の一断面—』内田老鶴圃
- 渡辺芳郎 二〇〇五 『幕末における耐火レンガ生産と在来窯業—薩摩藩・集成館事業の場合』『金大考古』第四九号

文の々 埋センターの日 2015 後期

10月

1-6 岡田遺跡試掘調査 / 4 埋文
ウオーク / 6 金上埜遺跡・雷遺跡
試掘調査終了 / 7 上高津貝塚ふる
さと歴史の広場「第14回企画展上
高津貝塚のころ」へ資料貸出「広畑
貝塚縄文土器」 / 8 高岡真美氏（神奈川県大
学 資料調査「武田遺跡群磁石」） / 10 ふ
るさと考古学⑧「土器の考古学2」
（講師・綿引逸雄氏） / 10-16 博物
館実習（八州学園大学） / 27-30 東原遺
跡試掘調査 / 23 岡林孝作氏・福
田さよ子氏（福原考古学研究所 研究指
導「十五郎六横穴墓群鉄釘」）



24 ふるさと考古学⑨「さわって
楽しむ考古学」(講師・広瀬浩二
郎氏) (下段右写真) / 28 ワンケース
ミュージアム38「絵になる埴輪II」

開始 / 30-31 虎塚古墳一般公開



30 三反田小学校6年生社会科見
学 / JRびゅう見学 / 31 クラブ
ツーリズム見学『埋文だより』第
43号発行

11月
1-3 虎塚古墳一般公開(埋文セ
ンター特別開館) / 5-6 大島中学
校2年生職場体験 / 6 阿字ヶ浦小
学校6年生社会科見学 / 行田市役
所都市計画課視察 / 6-8 虎塚古墳
一般公開 / 7 ふるさと考古学⑩
「壁画の考古学」(講師・堀江武史
氏) / 古墳にコープン協会主催「虎
塚古墳探訪ミステリーツアー」 /
21-22 勝田第三中学校2年生職場
体験



21-23 堂端遺跡試掘調査 / 12 藤本
武氏資料寄贈(大田房貝塚石器ほか) / 中

根小学校1年生どんぐり拾い



21 ナタリヤツデノヴァ氏・大貫
静夫氏(東京大学 資料調査「後野遺跡石器」)
2-7 中村信博氏資料調査 / 平磯小
学校6年生出張授業(勾玉づくり)

22 ふるさと考古学⑪「フィールド
探検」(講師・矢野徳也氏) / 谷口
陽子氏資料調査 / 27 堀口遺跡試
掘調査開始 / みとしん湊経営研究
会出張講座「那珂湊地区の古墳」
12月
1-9 平井遺跡試掘調査 / 2 堀口遺
跡試掘調査終了 / 6 ふるさと考古

虎塚古墳 花便り

16
ネジバナ

春の虎塚古墳壁画公開が終わると、虎塚古墳は子ども達で賑わいます。毎年、五月から七月は小学校の社会科見学で、たくさんの子も達がやってくるからです。見学時は、残念ながら壁画を見ることは出来ませんが、虎塚古墳の上に登って、古墳の形や大きさを体感しています。

そんな季節に、子ども達に気付かれることもなく、ひっそりと小さな花が咲きます。それが今回ご紹介するネジバナ(振花)です。ネジバナはラン科ネジバナ属の植物で、高さが一五〜四〇cmほどの多年草です。全国各地の日当たりの良い芝生などに生育します。花は名前のとおり、ねじられて螺旋状に咲きます。非常に小さな花のため、芝生に寝転がって近づかないと写真のようには見えません。

見学のために訪れた子ども達が、いつかこのお花に気付いてくれたら嬉しいなと思っています。(稲田健一)



2010.7.17

学⑫「楽しい楽しい考古学」(講師・

さかいひろこ氏) / 杉岡真人氏資

料寄贈「アカニシ化石」 / 10 岡田遺跡

本調査開始 / 10-22 岡田遺跡試掘

調査 / 二第一中学校区虎塚古墳

めぐりウォーク / 13 ワンケース

ミュージアム38終了 / 15 荒谷地

区試掘調査開始 / 16 上高津貝塚

ふるさと歴史の広場より資料返却

／17 茨城県教育研修センター長

期研修生見学 / 17-18 足崎西原遺

跡試掘調査

1月

9 荒谷地区試掘調査開始 / 13 郡

山市文化・学び振興公社「平成27

年度郡山市文化財企画展 古墳時

代の郡山はどこまで分かったか

―土器・墓・ムラから探る― / 資料貸出

／早川麗司氏(毛野考古学研究所)資料

調査(髷後遺跡ほか土器) / 13-15 堀口

遺跡試掘調査 / 15 茨城県立歴史

館「平成27年度特別展Ⅱ 茨城の宝

Ⅰ」へ資料貸出(馬渡埴輪製作遺跡馬形埴輪



21 岡田遺跡本掘調査終了 / 24 橋

本勝雄氏(千葉県教育振興財団)資料調査

【武田西堀遺跡ほか石器】



26-28 下高井遺跡試掘調査 / 27

文化庁文化財部分科会第三専門調

査会委員十五郎六横穴墓群視察

2月

2 第13回企画展「日立変成岩の石

剣―縄文時代晩期における石棒の製作

―開始 / 3 取手市埋蔵文化財セ

ンター第39回企画展「装身具の魅

力―華麗な出土装身具― / 資料貸出(三

反田蛭塚貝塚土製腕輪) / 16-19 堀口遺

跡試掘調査 / 20 ひたちなか市の

考古学第9回①「縄文のふしぎな

形の石器たち」(講師・後藤信祐氏)

／23 笠間市立北川根小学校6年



／24 郡山市文化・学び振興公社

より資料返却 / 27 ひたちなか市

の考古学第9回②「みちのくの石

棒生産」(講師・熊谷常正氏)

3月

5 ひたちなか市の考古学第9回③

「茨城県の古代石材産地と地質」

(講師・田切美智雄氏) / 2-5 堀口

遺跡試掘調査 / 12 ひたちなか市

の考古学第9回④「茨城県北部に

おける石剣の製作」(講師・鈴木素

行) / 18 平成27年度市内遺跡発掘

調査報告書」発行 / 19 岡林孝作氏

(福原考古学研究所研究指導(十五郎六横穴墓

群鉄釘) / 16-23 御所内I遺跡試掘調

査 / 25 村上達哉氏(飯能市郷土館)資

料調査(武田遺跡群須恵遺跡) / 荒谷地区試

掘調査終了 / 26 茨城県立歴史館

より資料返却 / 31 虎塚古墳一般公

開 / 『埋文だより』第44号発行

入館者状況(2015.10.1～2016.3.31)

月	開館 日数	個人		団体		計
		(人)	(団体)	(人)	(団体)	
10月	27	566	10 (0)	94 (0)	660	
11月	26	1137	12 (5)	97 (41)	1234	
12月	24	125	4 (0)	103 (0)	228	
1月	24	134	3 (0)	26 (0)	160	
2月	24	124	5 (1)	157 (45)	281	
3月	27	353	5 (0)	146 (0)	499	
合計	152	1873	29 (6)	529 (46)	2402	

()内は学校数

ひたちなか市埋蔵文化財調査センター及び(公財)ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社が開催する事業は『ひたちなか市報』及び下記のホームページでお知らせいたします。
http://business4.plala.or.jp/h-lcs/

編集後記の 笑う埴輪

公開講座「縄文時代の剣」の参考展示として企画展「日立変成岩の石剣」を組み立てることにした。茨城県北部における縄文時代晩期の石剣製作に焦点を定めるわけだが、こまごまとした資料ばかりでは単調になるので、展示の導入部には、縄文時代中・後期の大型石棒を置きたい。取手市西方貝塚と、つくば市若森遺跡の石棒については、すぐに電話で内諾をいただけた。

もう一つ候補にあげたのが、鹿嶋市山之上遺跡群の石棒だった。糸川崇さんに案内されて一七年前に所在を知ったが、地内の氏神社にむきだして祀られており、むやみに公表すると盗難の恐れがあった。展示への借用と、これを機に鹿嶋市教育委員会と交渉することはできないものかと、地主の方への交渉を、その糸川さんをお願いすることになった。

しばらくして話がまとまり、借用のため現地に向かった際にも、糸川さんにまた力を貸していただいた。二つに折れているとは言え、重さ七七・七kgになる石棒を一人で運ぶことは難しい。石棒は、三波川変成帯の緑色片岩で製作されている。

一〇〇kmを優に超えるこの鹿嶋の地まで、縄文時代には、どのようにして運んだのだろうか。



(2016.1.8)

ひたちなか埋文だより 第44号 2016年3月31日発行
 編集 公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社 発行 ひたちなか市埋蔵文化財調査センター
 〒312-0011 茨城県ひたちなか市中根3499 Tel. 029-276-8311 FAX 029-276-3699
 印刷 株式会社 高野高速印刷